「るみ姉」言葉で支える

悩みのにおい

4

首をかしげる遊撃手。笑顔が減った捕手。下を向いて歩く投手。口数が多くなった三塁手。いつもとは違う、しぐさ、表情。グラウンドを見渡せば、まるで間違い探しのように、悩んでいる選手にピントが合っていく。

大阪学芸（大阪市住吉区）の副主将でマネジャーの井坂瑠海さん（3年）は、悩みのにおいを嗅ぎ分けられる。

6月中旬、河南町にあるグラウンド。夜、練習を終えた約70人の野球部員に、小笹拓監督(30)が大阪大会のベンチ入りメンバーを発表した。

その隣で井坂さんは、名前を呼ばれた選手に1枚ずつ背番号を手渡した。

「頑張ろう」

一晩考えた一言をかけ続けた。「頑張れ、はひとごとみたいだなと思ったんです」

〇　〇

家族の食卓は、野球の話題が中心だった。小さい頃から週末は、兄太地さん(22)の練習を見に、グラウンドで過ごした。野球のルールは家族との会話で自然に覚えた。

2013年、中学2年の夏。甲子園常連校の明徳義塾（高知）に進み、甲子園に出場した太地さんの応援に行った。けがが続き、レギュラー入りから遠かった兄。「何が楽しくてやってるんやろ」。ずっと理解不能だった。

甲子園で兄はベンチ入りを果たし、代打で出場した。準々決勝で敗退。アルプス席から見えた兄は、大きく口を開け、大きな声で泣いていた。

悔しさだけじゃない。なぜか、兄の涙はすがすがしかった。マネジャーとしてここに来ようと決めた。

平日朝6時半に家を出て、朝練を手伝う。夏場は2ﾘｯﾄﾙのペットボトル40本以上を運び、選手の飲み物を用意する。スコアつけ、ノックのボール渡し。日々の仕事をこなしても、選手との距離はなかなか縮まらない。

副主将 できること全部する

「メンタル面でも支えよう」。選手を観察し始めた。プライドが高めな人。弱音を吐きがちな人。声の大小が気持ちのバロメーターになっている人。

「異変」をいち早く察知し、声をかける。「嫌われたらどうしよう」と迷ったこともあったが、「チームが強くなるために」と覚悟した。

るみ姉。川口大輔君（3年）は、井坂さんにあだ名を付けた。みんなの姉さんみたいな存在だからだ。

昨年7月、小笹監督は井坂さんを新チームの副主将に任命した。大阪学芸で、女子の副主将は2人目だ。

主将の田中俊成君（3年）は口数が少なく、背中でチームを引っ張るタイプ。川上拓也部長(32)は「一番の理解者として、主将を陰で支えてくれると期待した」。

昨秋。井坂さんは田中君が練習中に小さく首をかしげる姿を見逃さなかった。別の選手から、「主将を辞めたがっている」と伝え聞いていた。

「キャプテン辞めたいと思ってるん？」。LINEでぶつけた。返答は「正直考えてる」「（部員を）引っ張る気がなくなってきてる」。田中君の言葉をきちんと受け止めてから、「キャプテンが迷ってたらそれについて行く人たちも迷うで」と送った。

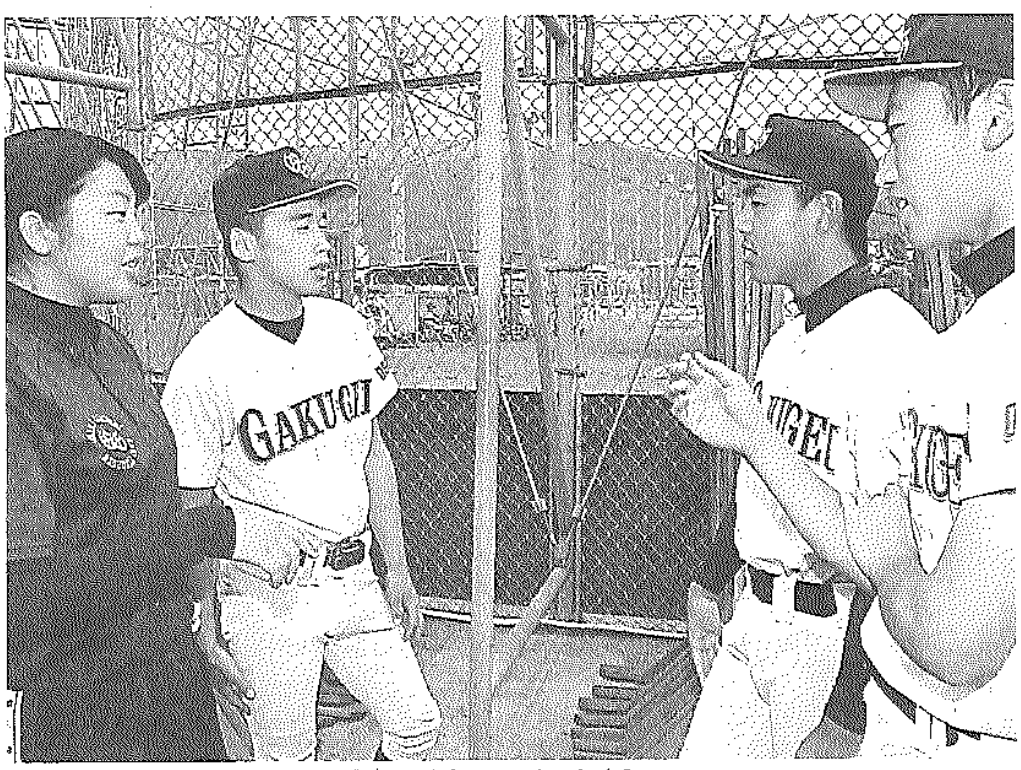
捕手の萩原健太郎君（3年）には、よく相談される。ある日の練習試合後、萩原君が歩み寄ってきた。いつもの笑顔がない。うまく投手をリードできていなかった。「ピッチャーがマイナスなら、キャッチャーがプラスになって引っ張らないと」と励ました。萩原君は落ち込むと、るみ姉の助言を思い出す。

春の府予選でチームは8強入りした。田中君は「るみ姉がいなければ、勝ち進めなかった。選手の一人だと思っている」と言い切る。

今夏、井坂さんは記録員としてベンチに入る。「笑ってお疲れさまと言えるよう、できることは全部したい」

試合当日。自分が鼻を利かせる間もなく、思いっ切りプレーしてくれたら。それが副主将としての願いだ。

（半田尚子）



チームの副主将は3人。（右から）主将の田中君、副主将の谷口洋平君、古城柊君、と話す井坂さん＝河南町さくら坂5丁目